

任脈・督脈と煉丹術の結合をめぐつて

加藤 千 恵

はじめに

今日の道教の學界では、煉丹の過程における主要な氣の周流經路が醫術における任脈・督脈に相當する、という説がほぼ認められており、各種の道教辭典にも記載されている。⁽¹⁾ この説を最初に唱えたのは、宋末元初の俞琰（一二三五—一三三四）であるとされているが、多くの研究がそれ以前に成立していた服氣法や煉丹法に任脈・督脈のはたらきを積極的に見出そうとしてきた。なぜなら、道教文獻には尾閭から泥丸までの脊骨に沿う經路を氣が

上昇するという記述がしばしば見られ、それが督脈に重なりと推測されたことに加え、俞琰自身も、任脈・督脈はそれとは異なる名稱で歷代の數々の仙術や道教の文獻中に見出すことができる」と主張しているからである。しかし、今回調査したところ、任脈・督脈の經路は一通りではなく、現存する文獻中にそれぞれ四通りから五通り⁽²⁾の説があり、初期の經路は必ずしも頭部を經由して循環するものではなかった。現在知られているような一つにつながる一對の任脈・督脈が現れたのは、北宋の『銅人腧穴針灸圖經』（二〇二六年。以下『銅人圖經』）が世に出

てからだと考えられる。そうであるにもかかわらず、俞琰は現在のような任脈・督脈の経路が『銅人圖經』成立のずっと以前から見えるとし、それが煉丹の氣の周流と共通していたという説を形成しようとした。醫書における任脈・督脈の變遷及び任脈・督脈と煉丹とが結びつくまでの過程について考察してみたい。

一 醫術における任脈・督脈

まずは醫書が傳えてきた任脈・督脈を検討したい。任脈と督脈は奇經八脈のうちの二脈であり、現在では、任脈は腹側、督脈は背側の體表の正中線上を流れ、舌と會陰で脈の兩端がつながり、頭部と腹部を一周する陰陽一對の脈とされている。しかし、傳統醫書に見える任脈・督脈の経路やその長さは一定ではなく、書籍によつてさまざまである。書籍それぞれに整理・編纂の歴史があるため、現行の書籍と他書に引用された同じ部分とを比べても、脈の情報が變化していることがある⁽³⁾。北宋時代に入つて國家による醫療政策が推進され、經穴經脈學の統

一標準化が圖られたことから、本來の脈の姿はますます見出し難くなっている。『素問』、『靈樞』、『太素』、『難經』、『甲乙經』、『脈經』、『銅人圖經』等傳統醫書に見られる任脈と督脈の経路を整理してみると、それぞれ四通りから五通りの経路を確認することができる。

任脈

A. 『太素』任脈・楊上善注所引呂廣所注『八十一難』(『脈經』平奇經八脈病もほぼ同じ)

任脈は胞門子戸に起こり、齊を挟みて上行し、胸中に至る。

B. 『難經集註』二十八難(『太素』任脈・楊上善注所引皇甫謐錄『素問經』、『銅人圖經』もほぼ同じ)

任脈は、中極の下に起こり、以て毛際を上り、腹裏を循りて、關元を上り、喉咽に至る。

C. 『靈樞』五音五味篇(『太素』任脈、『甲乙經』(醫統本)奇經八脈もほぼ同じ)

衝脈任脈は、皆な胞中に起こり、上りて背裏を循

り、經絡の海と爲る。其の浮にして外なる者は、腹右^⑤を循りて上行し、咽喉に會し、別れて脣口に終す。

D. 宋版『素問』骨空論（「甲乙經」（醫統本）奇經八脈、『聖濟總錄』卷百九十二所引「內經」もほぼ同じ。）

任脈は、中極の下に起り、以て毛際を上り、腹裏を循り、關元を上り、咽喉に至り、頤に上り、面を循り、目に入る^⑥。

任脈のAの起點「胞門子戶」は、『太素』楊上善注（六七五年）によると、「胞」は膀胱であるから、膀胱や子宮の入り口を指す。したがって、Aは膀胱・子宮の入り口に起り臍を経て胸中に至る經路である。Bは「中極」という下腹部下邊の穴の下、すなわち生殖器官の邊りに起り、「關元」という中極と臍の間の穴を経て喉咽に至る經路である。Cは衝脈（奇經八脈の一つ）と任脈に共通する經路で、膀胱もしくは子宮を起點とし、任脈としては唯一背側をめぐる經路と腹側をめぐる經路とに分かれ、腹側の體表をめぐる經路は脣口に至る。Dは

中極の下から腹側をめぐる目に至る經路である。任脈の起點はいずれもほぼ同じ生殖器官の位置である。Cは背側と腹側の雙方、その他はいずれも腹側を下から上へと向かい、それぞれAは胸、Bは喉咽、Cは脣口、Dは目の位置を終着點とする。

督脈

A. 『太素』督脈・楊上善注所引『八十一難』（『脈經』平奇經八脈病、『難經集註』二十八難及び二十九難・丁德用注もほぼ同じ）

下極の輪に起り、脊に竝びて上行し、風府に至る。

B. 『難經集註』二十八難

督脈は、下極の俞に起り、脊裏に竝び、上りて風府に至り、入りて腦に屬す。

C. 『甲乙經』奇經八脈所引『難經』（『聖濟總錄』所引『難經』、『銅人圖經』もほぼ同じ）

督脈は、下極の俞に起り、脊裏に竝び、上りて

風府に至り、入りて腦に屬し、巔に上り額を循り、鼻柱に至る。⁽⁷⁾

D. 『靈樞』營氣篇

其の支別なる者は、額を上りて巔を循り、項中を下り、脊を循りて骶に入る。是れ督脈なり。陰器を絡し、上りて毛中を過ぎ、臍中に入り、上りて腹里を循り、缺盆に入り、下りて肺中に注ぎ、復た太陰に出づ。

E. 宋版『素問』骨空論（『太素』督脈・骨空、『甲乙經』

奇經八脈所引『素問』もほぼ同じ）

督脈は、少腹に起こり、以て骨中央を下る。女子は入りて廷孔に繋ぐ。其の孔は溺孔の端なり。其の絡は陰器を循り、篡間に合し、篡後を繞る。別れて臀を繞り、少陰と巨陽⁽⁸⁾とに至る。

督脈のA、B、Cの經路については、いずれも「下極」を起點とする。『難經集註』二十八難・楊玄操注（七世紀末頃）によると、下極は脊骨最下端の穴である「長

強」を指すことから、脊骨下端に始まって脊骨に沿って上行し、Aは項部上端の「風府」穴まで、Bは風府穴を過ぎて腦まで、Cは頭頂を経て鼻柱に至るまでの經路を示す。Dは、營氣から分岐した氣が、AとCの經路とは逆方向に流れて、額から頭頂を経て項に下り、脊に沿って尾骶骨に至るのが督脈だとする。さらに陰器をめぐり、腹側を上って臍に入り腹中を経て、「缺盆」穴（鎖骨の窪み）から肺中に注いで手の太陰脈に合流する。Eの經路は、下腹に起こり、恥骨中央を下る。女子の場合は尿道の先端を経由する。⁽⁹⁾ その絡は、「篡間（會陰）」に合し、「篡後（肛門の後ろ）」をめぐり、さらに分岐して臀部をめぐって「少陰」と「巨陽」の二脈に合流する。

さて、道教經典においてしばしば說かれる氣の經路は、尾閥と泥丸を周流するというものである。任脈はCかDの下腹部から腎口もしくは目までの經路、督脈はBかCかDの頭部にまで至る經路が對應しなければ、尾閥と泥丸を往來する内丹の氣の經路との一致を説くことはできない。この説を成立させる可能性のある醫書の候補を舉

げると、任脈は『靈樞』、『太素』、『甲乙經』、『素問』、督脈は『難經』、『銅人圖經』、『靈樞』ということになる。任脈と督脈の各候補の中で、どちらにも属している書名は『靈樞』のみである。ただし、『靈樞』が示す任脈のC経路と督脈のD経路はいずれも腹側と背側の雙方を往來する脈であり、二脈で連なつて一つの周流経路を形成する煉丹の経路とは異なる。

そこで兪琰が選んだのは、中極から喉咽に至る任脈と下極から鼻柱に至る督脈を示す『銅人圖經』の経路だった。それならば、二脈は完全につながっているわけではないが、身體の腹側と背側の正中線をほぼ一周することができよう。『銅人圖經』は、北宋に國家規模で醫學の標準化が圖られた際、經穴經脈學の統一標準化を意圖して王惟一によって著された醫書である。

任脈のB経路と督脈のC経路の組み合わせである『銅人圖經』が選ばれるのであれば、同じ組み合わせの『難經』が選ばれてもおかしくはない。そこで、もう一つの要素である二脈の關係性について考えてみたい。兪琰が

想定する任脈・督脈の情報源、すなわち『銅人圖經』は、二脈の経路を示した後、任脈は「陰脈の海に属す」、督脈は「陽脈の海に属す」と説明することから、八脈の中で任脈と督脈が陰氣と陽氣を蓄える一對の脈としてとらえられていることがわかる。この「陰脈の海」「陽脈の海」という言い方は、他の醫書にも見られるが、『銅人圖經』以前に任脈と督脈とが陰と陽の對應關係にあるものはない（次頁對應表參照）。たとえば、三世紀頃の『脈經』及び『難經集注』呂廣注においては、衝脈が陰脈の海、督脈が陽脈の海に當たり、任脈と督脈ではなく、衝脈と督脈が陰陽のペアとなっている¹⁰。

これらの資料から見えてくるのは、任脈と督脈がつながって循環する陰と陽の一對の脈となったことを確認できるのは、北宋の『銅人圖經』が世に現れてからだということである。任脈と督脈が頭部を含めて循環し、一對となつてはじめて、煉丹との關係を説くという發想が生まれるだろう。したがって、煉丹との關係を主張するためには、北宋の『銅人圖經』の出現を待つ必要があつた

と考えられる。

任脈督脈の初期の経路については、依然として不明の

と任脈督脈との結びつきをはじめて明確に主張したという
ことである。

要素もあるが、⁽¹⁾ 確實にいえるのは、俞琰が条件のそろった『銅人圖經』の説をいち早く採用し、煉丹の氣の周流

任脈・衝脈・督脈の陰陽對應表

書名篇名	督脈	衝脈	任脈
『脈經』平奇經八脈病	陽脈の海	陰脈の海	
『難經集註』二十八難・呂廣注	陽脈の海	陰脈の海	
『太素』督脈・楊上善注所引『八十一難』	陽脈の聚		
『甲乙經』奇經八脈所引『難經』	陽脈の海		
『銅人圖經』	陽脈の海		陰脈の海
『聖濟總錄』卷一九二奇經八脈所引『難經』	陽脈の海		
『內照圖』	陽海		陰海
『易外別傳』『周易參同契發揮』	陽脈の海		陰海の海
『十四經發揮』	陽脈の海		陰脈の海
『奇經八脈攷』	陽脈の海		陰脈の海

二 兪琰による任脈・督脈と煉丹の結合

兪琰は易に關する著作を數多く遺した易の専門家であるが、道教の主要な經典である『陰符經』を注釋した『黃帝陰符經註』、呂純陽が内丹の奧義を説いたとされる詞を數々の内丹書を引用して解釋した『呂純陽真人沁園春丹詞註解』が兪琰の著作として『道藏』に收録されており、とくに煉丹術に關わる道教文獻にはかなり精通していた様子が窺える。

兪琰が煉丹と任脈・督脈の關係を指摘する記述は、『周易參同契發揮』（一二一〇年刻）と『易外別傳』（一二八四年序）にそれぞれ一か所ずつ見られ、それらの内容はほぼ一致している。『周易參同契發揮』は、『周易參同契』という後漢に成立した丹經の祖とされる謎多き書内丹術として解釋して注を施したものである。『易外別傳』は、易の各種の圖や『易經』中の語を宋儒及び『周易參同契』等と關連づけて説明し、天地と人身のはたらしの同調性を説いたものである。

兪琰は、『周易參同契』中の「易行周流、詘信反覆（易は行り周流して、詘信反覆す）」というわずか八字に注釋するかたちで、長文の説を展開している。その中で、人身は天地のようなものであり、丹を作る方法は天地の營みと異ならず、その要諦は任督二脈にあると説く。

人身の首は乾にして腹は坤、儼として天地の如し。其の二氣の上升下降するも、亦た天地の如し。『丙指通玄祕訣』に云う、「日月は常に黃赤道を行り、衆眞此れを學びて還丹を作る」と。其の法は即ち天地と異なる無し。然して其の日月の運用に效う所以は、天地と以て功を同じうすればなり。其の要は任督二脈に在り。蓋し任督二脈は、一身の陰陽の海、五氣の眞元爲り、此れ機會爲り。任脈は、中極の下に起りて、以て毛際を上り、腹裏を循り、關元を上り、咽喉に至りて、陰脈の海に屬す。督脈は、下極の臛に起りて、脊裏に竝び、上りて風府に至り、腦に入り、巔に上りて額を循り、鼻柱に至りて、陽

脈の海に屬す。之を任脈と謂う所以は、女子之を得れば、以て妊養すればなり。之を督脈と謂うは、其の經脈の海を督領するを以てなり。鹿の壽は長生して、五百歳にして白鹿と爲り、千歳にして青鹿と爲る。蓋し能く其の督脈を通ずる者なり。龜鶴蟾蜍の如きは、皆壽は千歳。蓋し能く其の任脈を通ずる者なり。『南華真經』に云う、「督に緣りて以て經を爲せば、以て身を保つべく、以て生を全うすべし」と。人能く此の二脈を通ずれば、則ち百脈皆通じ、自然に周身流轉し、停壅の患有ること無くして、長生久視の道、斷じて此に在り。〔『周易參同契發揮』中篇〕

人身の二氣の上昇下降は天地におけるのと同じだと説いた後、『内指通玄秘訣』という煉丹の書（佚書。詳細は不明）を引用して真人たちは日月の運行を學んで還丹を作ったと述べ、任脈・督脈の周流がまさに日月の運行を模倣した重要なはたらきであるとする。

次いで任脈と督脈の身體における役割と經路と名稱の由來がそれぞれ説明されている。身體における役割を示す一重傍線部分は、宋代の醫書『玄門脈訣内照圖』（一〇九五年校、一二七三年刊。『新刻華陀内照圖』もほぼ同じ。以下『内照圖』所引「内丹要訣」の冒頭の一文に一致する。「内丹要訣」は『内照圖』に收録される「陰海陽海二圖」の説明文として收載されたものであり、「内丹」の語と任脈・督脈が文獻上でもっとも早く出會つた例といえるだろう。「内丹要訣」において任督二脈について言及されているのは、『周易參同契發揮』と一致する「一身の陰陽の海、五氣眞元爲り、此れ機會爲り」の一文のみで、あとは専ら上唇内側で齒の付け根に位置する二脈の接點「𪚗交穴^{ぎんこう}」について説かれており、𪚗交穴から得られる「藥」を服用することが長生をもたらすのだという⁽¹²⁾。この部分のみから内丹と任脈・督脈が結びついているとは判断できないが、この一節が兪琰に煉丹における體内の陰陽二氣の周流と任脈・督脈が同じであるという主張を展開させるきっかけとなった可能性が高い。

次に經路を示す二重傍線部は醫書の『銅人圖經』、名稱の由來を示す點線部は『黃帝內經素問』骨空論篇の王冰注（七六二年）から引用されている。第一章で検討したように、任脈・督脈の經路については各種傳統醫書にも説かれているが、文字の配列から、兪琰が依據するのは『銅人圖經』と特定できる。しかし、兪琰はその文獻名を明示していない。『易外別傳』にも同じ箇所が引用されているが、「醫書に云う」としか記されていない。

この任脈と督脈の説明を見る者たちは、初期の傳統醫書である『素問』か『難經』か『脈經』か、あるいは、それらに共通して收録される文だと思ひ込むだろう。また、『內照圖』において「內丹要訣」の直後に描かれる「陰海陽海二圖」にも同じ『銅人圖經』の文が附されていることから、兪琰が「內丹要訣」の一部と併せてそのまま引用した可能性も大いに考えられる。

これに次いで、鹿や龜が長壽である理由を督脈や任脈が通じているからだとし、人の長壽の祕訣もこれら二脈にあることを主張する。次に『南華真經』（『莊子』養生

主篇）中の「督」について説く一文を引用する。

注はさらに續き、天地の運行と同様の身體における氣の周流する經路を示すべく、『道德經』、『陰符經』、『黃庭經』、『度人經』、『崔公入藥鏡』、『呂純陽詩』、『上清集』、『全真集』など合計三十六篇の道教文獻それぞれ二句から四句ずつを列擧する。ただし、引用された文に任脈・督脈の語は一つも見られない。ここに列擧される多數の文獻のうち、『黃庭經』⁽¹³⁾を引用して示す文の内容を検討してみたい。

『黃庭經』に云う、皆な心内に在りて天經を運らせ、晝夜之を存すれば自ずから長生す。（『周易參同契發揮』中篇「易行周流、詘信反覆」兪琰注）

『易外別傳』にもここに引用されたのと同じ『黃庭經』の二句が引用されている。『易外別傳』では、この二句を引用した後、句中の「天經」を解説して「天經は乃ち吾が身の黃道にして、呼吸して此に往來するは、即ち

任督二脈是なり」といい、『黃庭經』にはすでに「天經」という語で任脈・督脈の流れが示されていたと述べている。問題は、『黃庭經』が成立した頃、任脈・督脈がまだ俞琰の記するような経路になっていなかったことである。俞琰は、任脈・督脈がこの経路となる前に成立した古い道教文献にも、その経路が適用されるかのように説いている。

三 俞琰の説く氣の周流

俞琰が氣の周流について説いた箇所は他にもあり、任脈・督脈の周流とは別のかたちも見られる。「子時に氣は尾閭に到り、丑寅に腰間^⑬に在り、卯辰巳に脊膂に在り、午に泥丸に在り、未申酉に胸隔に在り、戌亥に則ち又た腹中に歸る」（『易外別傳』）、すなわち下腹部から出發して脊骨沿いを上昇し、頭部泥丸に至ったら胸部を経て下腹部に歸るといふ任脈・督脈上とも解釋できる経路を示すものもあれば、次のように五臓をめぐりながら下腹部と頭部を周流する経路もある。

兩腎を穿ち、夾脊を導き、心經を過ぎ、髓海に入り、肺膈を衝き、肝を度し脾を歷し、復た丹田に還る。
（『周易參同契發揮』上篇）

これは『周易參同契』上篇の二句「金砂五内に入りて、霧散すること風雨の若し」に俞琰が注釋して述べた文である。「金砂」という黄金と丹砂に見立てた氣を、
兩腎【水】↓夾脊↓心經【火】↓髓海（腦）↓肺膈（背部肩甲骨内側の穴）【金】↓肝【木】↓脾【土】↓丹田と、五臓すべてに五行相剋の順に導いていく。^⑭俞琰の説く任脈・督脈の経路と比べてみると、下腹部生殖器官邊りを起點・終點とし、腦の「髓海」にて折り返す點は同じかもしれないが、臓器から臓器へと内部を流れていて、任脈・督脈の流れる體表の正中線上ではない。右記の文に續いて、體内をめぐる氣の様子が「滂然として雲霧の四塞するが如く、颯然として風雨の暴かに至るが如し」、すなわち雲や霧が湧き起こって充滿し、さっと風が吹いてにわかにな雨が降り出すかのようにだと表現されている。

この一文は『周易參同契』中の「霧散ずること風雨の若し」に對する注釋であるから、經文中の語を用いてそのように記述しているに過ぎないのかもしれないが、兪琰は至るところで、氣の状態を雲霧や風雨に喩えている。

火力既に盛んなれば、其の氣滄然として上騰し、山川の雲起つと相似たり。夫の升りて泥丸に入るに逮びて、然る後に化して甘雨と爲り、下りて重樓に入る。〔周易參同契發揮〕上篇）

下腹部を火で燃やすように盛んに熱すれば、雲が湧き起るように氣が上昇し、身體においては天に匹敵する頭部泥丸に到達すると、「甘雨」と化して「重樓（喉）」を通過して臟腑に下っていくという。また、別の句に注して、「蓋し丹田の火熾盛なれば、則ち雲悉滄し、泥丸に風生じて宛も龍吟虎嘯の聲有るがごときなり」（『周易參同契發揮』上篇）、すなわち丹田の火が盛んであれば、雲や霧が立ち昇り、泥丸に風が生じてまるで龍や虎がう

なる聲が響くようだという。龍と虎は體內で混ぜ合わせる陰陽二氣の藥材を喩える語である。體內をめぐる氣の状態は、一筋に連なつて體表を流れるというものではなく、われわれが目にする天地の營みと變わらない。海水が水蒸氣となつて天に上昇しては、雨となつて大地に降り注ぎ、上空で冷たい氣と溫かい氣が交錯したならば、龍虎がうなり聲を上げるように雷が鳴り響くという。

雲霧のように氣を上昇させ、雨を降らせるように五臟に注ぐ方法は、傳統的な行氣法を受け継いでいるといえるだろう。たとえば、唐代に成立したとされる『幼真先生服内元炁訣』には、下丹田から背骨に沿う二筋の経路で泥丸まで導いた氣を、頭部、兩腕指先、中丹田、五臟、下丹田、生殖器官、足の裏の湧泉穴まで行き渡らせることを存想する方法が説かれている。¹⁵⁾ その文に次いで、「之を鼓すに雷霆を以てし、之を潤すに風雨を以てす」といい、その理由を「只だ天に泉源有りて、雷霆騰鼓するに非ざれば、以て萬物を潤すこと無きが如し」と説明する。雷鳴が響かなければ、雨は萬物を潤さない。重要

なのは、頭部に引き上げた氣で、臟腑も四肢の末端までも潤すことである。このような氣の周流の淵源は、さらに六朝時代にまで遡るだろう。五世紀頃の『老子中經』にも、頭部で交えた陰陽二氣が臟腑をめぐりながら丹田へと流れていき、丹田にいる神龜が呼吸をすることによって氣が風雨となって四肢の隅々にまで行き渡ることが説かれている。⁽¹⁶⁾

俞琰の説く氣の周流は、必ずしも任脈・督脈の經路をたどっているとは限らない。氣の周流の表現法の一つとして任脈・督脈が提唱されたのであり、氣の經路は任脈・督脈の經路のみだと考えていたわけではなかったようだ。

醫術における初期の任脈・督脈の經路が必ずしも頭部を經由し循環するものではなかったのに對し、道教の文獻においては、天に相當する頭部と地に相當する腹部とを循環する經路は古くから設けられていた。⁽¹⁷⁾ そうすると煉丹術が醫術においてすでに開發されていた任脈・督脈の經路を取り入れたと考えるよりは、むしろ任脈・督脈

が身體の腹部から頭部までを周流する一對の脈となつてから、煉丹術との類似性が指摘されるようになったと考えるのが妥當であろう。またさらには煉丹術における氣の周流に影響を受けて、任脈・督脈の經路が整理された可能性さえ考えられる。

四 俞琰の任脈・督脈説が 後世に與えた影響

俞琰以降、醫術の用語である任脈・督脈を用いた俞琰の氣の周流説がすぐさま積極的に内丹説に取り入れられ定着したとは言い難い。明の本草學者李時珍（一五一八—一五九三）が『奇經八脈攷』（一五七七また七八年刊）に、奇經八脈が醫術と煉丹術の雙方にとつてきわめて重要な脈であることを強調し、俞琰の説や張伯端（九八四？—一〇八二？）が奇經八脈について説いたかのように見える説を收録して、任脈・督脈を煉丹と強力に結びつけようとした。『奇經八脈攷』の企てについて検討したい。

李時珍は冒頭の「奇經八脈總説」において、「八脈散

じて群書に在る者は、略して悉くせず」といい、これを知らなければ、醫家は「病機を探る」ことができず、仙家は身體を「爐鼎」と化して丹を煉ることができないと告げる。もしも李時珍の言う通りであれば、任脈や督脈が名稱や經路を明確に示さないまま、斷片的に道教文獻中に多く埋もれているという龔琰の主張にもうなづける。しかし、これまで確認してきたように、任脈・督脈の存在自體、けつして明確ではなかった。任脈・督脈以外の奇經八脈となると、經路はさらにはつきりしない點が多い。李時珍のこの言葉は、八脈の曖昧さをかばいごまかして、八脈への信賴を高めようとしているようにさえ見える。李時珍は傳統醫書に従つて督脈の經路や脈上の穴位の情報を記した後、次のような見解を述べている。

李瀕湖曰く、任督二脈は、人身の子午なり。乃ち丹家の陽火陰符升降の道、坎水離火交媾の郷なり。故に魏伯陽『參同契』に云う、「上を閉ざせば則ち有と稱し、下を閉ざせば則ち無と稱す。無なる者は以

任脈・督脈と煉丹術の結合をめぐつて

て上に奉じ、上は神徳の居有り。此の兩孔穴法は、金氣¹⁸亦た相い須つ」と。崔希範『天元入藥鏡』に云う、「鵲橋を上り、鵲橋を下る。天は星に應じ、地は潮に應ず」、「歸根の竅、復命の關。尾閭を貫き、泥丸に通ず」と。『大道三章直指』に云う、「修丹の士の身中の一竅、名づけて玄牝と曰う。正に乾の下坤の上、震の西、兌の東、坎離交媾の地に在り。人身天地の正中に在りて、八脈・九竅・十二經・十五絡を聯轡す。虛間一穴、空に黍珠を懸く。醫書之を任督二脈と謂い、此れ元氣の由りて生ずる所、眞息の由りて起る所なり。修丹の士、此の竅を明らかにせざれば、則ち眞息生ぜず、神化基づく無きなり」。龔琰『參同契』に注して云う、人身の血氣、往來循環して、晝夜停まらず。醫書に任督二脈有り、人能く此の二脈を通ずれば、則ち百脈皆南通ず。『黃庭經』に言う、「皆な心内に在りて天經を運び、晝夜之を存すれば自ずから長生す」と。天經は乃ち吾が身の黃道にして、呼吸して此に往來するなり。

鹿は尾闕に運びて、能く督脈を通じ、龜は鼻息を納れて、能く任脈を通ず。故に二物皆な長壽す。此の數説、皆な丹家の河車の妙旨なり。（『奇經八脈攷』督脈）

李瀕湖すなわち時珍は、任督二脈が「丹家の陽火陰符が升降する道であり、坎水離火が交媾する郷である」と明言し、その根拠を魏伯陽『參同契』、崔希範『天元入藥鏡』、『大道三章直指』、俞琰注『參同契』、『黃庭經』から抜き出している。そのうち、約三分の一を占める傍線部分は、俞琰が『周易參同契發揮』や『易外別傳』で唱えた説や引用部分をそのまま寫し取っている。見解の大部分を俞琰から受け継いでいることがわかる。

俞琰が唯一觸れていない文獻『大道三章直指』については、著者、成立とも不明である。ここに引用される一節は、元代の成立と推測されている『陳虛白規中指南』卷下の「玄牝」という穴について説かれた一節に一致する部分を見出すことができる。『奇經八脈攷』に引用さ

れる『大道三章直指』が説いているのも同じく「玄牝」穴であり、脈ではない。ところが、『大道三章直指』はこの一穴について「醫書は之を任督二脈と謂う」（波線部）と述べている。この一句だけが『陳虛白規中指南』中には缺けていることから、何者かが後にこの句を挿入し、玄牝穴を任督二脈にすり替えようとしたことが疑われる。すり替えたのが李時珍自身ではないとしても、どう見ても穴のことにしか見えない情報をここに任督二脈として掲載した李時珍には、情報操作の意圖を感じざるを得ない。

さらに、『奇經八脈攷』中の陰蹻脈を解説した部分は、『張紫陽八脈經』^⑨からの引用が大部分を占める。張紫陽とは、内丹の聖典『悟真篇』（一〇七五年序）を世に出し、後世に多大な影響を與えた張伯端の號である。『八脈經』の記述には内丹に關わる内容が含まれるものの、道教文獻中に張伯端が『八脈經』を著したという痕跡は見られず、張伯端が説く内容に合致しているとは言い難い。しかも、張伯端より後の金代の道士馬鈺（號丹陽子。一一

二三―八三)の語句が引用されていることから、選者は張伯端ではないと考えられる。

さて、そこに示される八脈は、醫書に説かれるような起點と終點のある經路ではなく、たとえば、「督脈は臍後に在り」、「陰蹻脈は尾閭前陰囊下に在り」というように、ある一點の部位である。人には八脈が具わっているが、閉ざされていて開いていない。神仙だけがそれを陽氣で衝き開くことができるという。陰蹻脈は、最初にそこを開くことができれば、諸脈はみな通じるという重要な脈であり、「總じて丹經に在り、其の名頗る多し、天根と曰い、死戸と曰い、復命關と曰い、…」という。すなわち、李時珍が總説で述べたのと同様に、本來の脈名ではないさまざまな別稱で煉丹の書に古くから現れていたのだとする。

李時珍が『八脈經』を引いた直後に述べた見解によると、煉丹書は、任脈、衝脈、督脈、命門、三焦を説いても、「未だ専ら陰蹻を指す者有らず」とし、醫家の説とも異なることを指摘しつつ、「然れども内景隧道、惟だ

返觀する者の能く之を照察するに、其の言必ず謬らざるなり」と、『八脈經』が記す脈の効果を評價している。

『奇經八脈攷』中、張伯端の名はもう一か所に登場する。李時珍が督脈について見解を述べた後に、王海藏(好古の號。一二〇〇?―一二四八?)『廣爲大法』卷一所收の張平叔(伯端の字)の言葉が引かれている。これは、實際には『悟真篇』の注釋者の一人である宋の葉士表によるものであり(一一六一年。『修真十書』卷二十六所收)、張伯端ではない。内丹を論じてはいるが、督脈の語が明記されているわけではない。⁽²⁰⁾

では、『奇經八脈攷』が世に出た後、任脈・督脈は煉丹界に普及したのか。たとえば、明代にベストセラーとなった『性命圭旨』(一六一五年以前)は、「時照圖」と題する人體圖に添えて俞琰の『易外別傳』とほぼ重なる文を掲載しながら、經文中に二脈の名が現れるのは「閉任開督」のわずか一か所のみである。しかも「閉任」は俞琰や李時珍の主張するところではない。

清の柳華陽に至って、その著『金仙證論』(一七九〇)、

『慧命經』（一七九四）に「任督二脈圖」が現れ、任脈・督脈の經路が視覺的に明示されるようになった。⁽²⁾ただし、『金仙證論』は「督脈は脊骨の外に在りて、任脈は上下唇に止む」などの舊説は「俗醫の妄指」とし、煉丹家が自ら檢證した脈を示すことで、やっと道教の流派の中に醫術の説が取り入れられた。圖に描かれる脈は、俞琰が引用した『銅人圖經』が説く脈よりも、身體の中心部に近い位置に設定されている。柳華陽の圖に従うならば、『靈樞』が説くような、體表をめぐる男性の口ひげに榮養分を運ぶはたらきをする任脈とは、まったく別の脈といわざるをえない。⁽²⁾

おわりに

北宋『銅人圖經』以前の任脈・督脈の經路はそれぞれいくつかの説があつて、統一されていたわけではなく、二脈は一つにつながる一對の脈ではなかった。その後、宋末元初の俞琰が『銅人圖經』の説く任脈・督脈がそれ以前に成立していた道教經典に見えることを主張し、明

の李時珍が俞琰の説を受け繼いで任脈・督脈と煉丹との關係を説いたが、煉丹家たちは醫家の説をなかなか受け入れようとはしなかった。かなり後になって清の道士柳華陽が提唱したのは、醫家が説いた經路そのままではなく、煉丹家の任脈・督脈とも稱すべきものだった。結果的には、煉丹の氣の周流經路は任脈・督脈に一致するといえるかもしれない。しかし、その任脈・督脈の經路自体にけつして小さくはない變遷とぶれがあり、⁽²⁾至つて兩者の關係が説かれた後も、煉丹家が任脈・督脈の説を自ら主張するに至るまでにはかなりの時間を要したことを指摘しておきたい。

注

- (1) 李遠國編著『中國道教氣功養生大全』（四川辭書出版社、一九九一年）「小周天」九〇頁、「河車」三五八―三五九頁。野口鐵郎他編『道教事典』（平河出版社、一九九四年）「河車」六五頁、「小周天」二七五頁、「督脈」四六六―四六七頁。中國道教協會・蘇州道教協會『道教大辭典』（華夏出版社、一九九四年）「小周天」一五五頁、

「河車」六八五頁。胡孚琛主編『中華道教大辭典』（中國社會科學出版社、一九九五年）「任督」一一七三頁、「周天」一一九九—一二〇〇頁、「小周天火候」一二〇〇頁、「河車搬運」一二五四頁。Fabrizio Pregadio 編、*The Encyclopedia of Taoism*, Routledge, 2008 「督脈・任脈 Control Channel and Function Channel」三九一頁、「周天 Celestial Circuit」一一八七—一二八八頁など。

- (2) 李遠國『道教氣功養生學』四川省社會科學院出版社、一九八八年、四〇八—四一〇頁。「三浦國雄」周天功—體內における氣の周流—、「大阪市立大學文學部紀要人文研究」第四十二卷第九分冊、一九九〇年。

- (3) 現行の書籍と他書に引用された同じ箇所の脈の記述に差異が見られる状況については、嵯峨野智夏「任脈・衝脈概念の古態と轉換」（日本内經醫學會季報『季刊内經』二〇一六年夏號・通卷二〇三號）が参考になった。

また、資料の扱い方について、嵯峨野氏に直接教示いただいた。任脈・督脈の起源については、李建民「生命史學—從醫療看中國歷史」第三章「考古發現與任脈學說的再認識」（三民所局、二〇〇五年）に出土資料をはじめとする豊富な資料を用いた考察がある。傳統醫書の成立と傳承の歴史については、眞柳誠『黃帝醫籍研究』（汲古書院、二〇一四年）参照。

- (4) 北宋の國家規模での經穴經脈學の統一標準化、醫書

校訂については、西岡爲人『中國醫書本草考』（南大阪印刷センター、一九七四年）一八三—一九九頁、浦山さか『中國醫書の文獻學的研究』（汲古書院、二〇一四年）第三章「北宋の醫書校訂について」、小曾戸洋・天野陽介『針灸の歴史—悠久の東洋醫術』（大修館書店、二〇一五年）第七章「宋元の針灸書」参照。

- (5) 『太素』及び『甲乙經』は「右」字なし。

- (6) 現行の宋版『素問』は、唐の王冰の改編と北宋の校正醫書局の校定を経ており、一世紀初期の原『素問』そのままではないと考えられている。したがって、任脈についてはBの『太素』楊上善注所引皇甫謐錄『素問經』の説く喉咽までの經路が原型に近い記述を留めていると考えてよいだろう。また、一〇六九年までに『素問』に附された新校正注は、『難經』、『甲乙經』を按ずるに、「上頤循面入目」の六字無し」といい、明李時珍の「奇經八脈攷」任脈は、『難經』、『甲乙經』は並びに「循面」以下の説無し」と述べていることから、本来『甲乙經』に記載されていた任脈は、現行本に見られるような「頤を上り、面を循り、目に入る」というDの經路ではなかったことがわかる。

- (7) 督脈のA、B、Cのすべてに『難經』（八十一難）の書名が舉がり、『難經』に三通りの經路が記されていることになる。Bの經路を示す現行の『難經集注』は、

幾段階かの編纂を経て南宋に成立したことが指摘されている。Cの経路は、『甲乙經』や『聖濟總錄』に引かれる『難經』に見えるが、『甲乙經』の成書は三世紀後期とされるものの、編者、傳承とも疑問視されている點が多く、『聖濟總錄』に引かれる『難經』は唐の楊玄操の改編を経た後のものである。これらを考慮すると、Aの『太素』の引く『八十一難』が最も原型に近い説を留めると考えるのが妥當であろう。任脈についても同じことがいえるので、Aの『太素』が引く『八十一難』の方がBの『難經集註』よりも原型に近く、『難經』の本来の経路は、任脈はAの胞門・子戸から胸、督脈はAの下極から項までの二筋であった可能性が高い。『難經』の成立経緯については、前掲注(3)所引眞柳書第三章『『難經』概説』、篠原孝市『『難經』解題』(『難經古注集成』第六冊(解題・索引)、大阪・東洋醫學研究會、一九八一年)参照。『甲乙經』の成書、傳承、現存本の問題については、篠原孝市『『甲乙經』總説』(『東洋醫學善本叢書8 解題・研究・索引』、前掲注(3)所引眞柳書第四章『甲乙經』参照。

(8) Eの文はさらに「中絡者、合少陰、上股内後廉、貫脊屬腎。與太陽起於目内眦、上額交巔上、入絡腦、還出別下項、循肩膊内、俠脊抵腰中、入循脊絡腎」と續く。「少陰」と「太陽」はそれぞれ十二經脈の足少陰脈と足

太陽脈のことであり、Eの経絡が到達する「少陰」と「巨陽」(巨陽は太陽の舊稱)に對應している。したがって、ここに説かれる督脈は、Eの経路に加え、足少陰脈と足太陽脈をも通過する長大な脈であるかのように讀み取れる。林孝信氏は、ここに見える「少陰」が『靈樞』經脈篇(『太素』經脈連環)所收の「腎足少陰之脈」、「太陽」が『靈樞』經脈篇(『太素』經脈連環)所收の「膀胱足太陽之脈」に一致することから、『素問』骨空論は少陰と巨陽を注釋するために『靈樞』經脈篇の文を引用し、それが後に經文に紛れ込んだ可能性を指摘している。林孝信「日曜講座『素問』骨空論篇(その二)」(『季刊内經』通卷二三三號、二〇二三年)参照。この推測通りだとするならば、もともと『素問』骨空論が示していたのはEに示した範圍の経路ということになる。

(9) ここには女子の場合の経路のみが記されるが、これに對する男子の場合の経路は、Eと注(8)に引用した文の直後に、「其男子、循莖下至纂、與女子等」と記される。

(10) 督脈と對を爲すのは、古くは任脈ではなく衝脈であったということは、すでに前掲注(3)所引嵯峨野論文が指摘している。氏が指摘するような、任脈と衝脈の流注部位が入れ替わるといふ問題が起こっている以上、任脈を調査するには、衝脈も併せて調査する必要がある

だろう。表の『太素』楊上善注所引『八十一難』、『甲乙經』所引『難經』、『聖濟總錄』（一一一七年までに成書、一一二七年刊刻）所引『難經』は、いずれも督脈は陽脈の海（もしくは陽脈の聚）と稱されるが、陰脈の海は設定されていない。

(11) 穴位に着目し、八世紀以前の『素問』文章を収録する『太素』と現行の『素問』の任脈・督脈上の穴位を比べてみると、穴の總數と頭部の穴の有無に違いが見られる。任脈については、『太素』氣府「任脈之氣所發者十八穴、喉中央二、鳩尾下三寸、胃脘五寸、胃脘以下至橫骨八寸一一、腹脈法。」『素問』氣府論「任脈之氣所發者二十八穴、喉中央二、膺中骨陷中各一、鳩尾下三寸、胃脘五寸、胃脘以下至橫骨六寸半一、腹脈法也。下陰別一、目下各一、下脘一、斷交一。」督脈については、『太素』氣府「督脈氣所發者二十六穴、項中央三、大椎以下至尻二十節間各一、骶下凡二十一節、脊椎法。」『素問』氣府論「督脈氣所發者二十八穴、項中央二、髮際後中八、面中三、大椎以下至尻尾及傍十五穴、至骶下凡二十一節、脊椎法也。」『素問』に記載されている頭面部の穴（傍線部）が『太素』には記載されていない。これは、初唐以前、任脈・督脈は頭部にまで到達していなかったことを示している。ただし、『外臺祕要方』（七五二年序）及び『醫心方』（九八四年）に、任脈・督脈の經路は示されな

いものの、任脈・督脈が口附近の穴位にまで到達していた痕跡が見られることから、唐代に任脈と督脈が頭部でつながっていた可能性も否定できない。以下の穴位の資料については、嵯峨野氏に教示いただいた。『外臺祕要方』卷三十九「水溝、在鼻柱下人中、督脈手陽明脈之會。承漿、一名天地、在頤前下唇之下、足陽明任脈之會。」『醫心方』卷二「（木）「水」溝一穴、在鼻柱下人中、低唇取之、刺入三分留六呼、灸三壯。督脈、又手陽明大腸：承漿一穴、一名天地、在頤前下唇之下、開口取之、刺入二分留六呼、灸三壯。任脈。」また、出土資料について觸れておくと、湖南省長沙馬王堆漢墓（前一六八年）から出土した『陰陽十一脈灸經』及び『足臂十一脈灸經』に任脈・督脈等奇經への言及は見られない。ただし、四川省綿陽雙包山漢墓（前一七九—前一四一）から出土した經脈木人模型には頭部から背部までの正中を通る線が描かれており、文獻には見出せない頭部の氣の流れがすでに感得されていたことが窺える。四川省成都市天回（老官山）漢墓（前一五六—前八七）から出土した漆人形は、腹側の喉から下腹部にかけて正中線は描かれているが、背部の正中線は描かれていない。雙包山經脈木人模型については、馬繼興「雙包山漢墓出土的針灸經脈漆木人形」（『文物』一九九六年第四期、總第四七九期）、李建民「督脈與中國早期養生實踐——奇經八脈的新研究之二

『中央研究院歴史語言研究所集刊』第七十六本第二分、二〇〇五年）、眞柳誠「經穴部位標準化の歴史的意義」〔詳解・經穴部位完全ガイド／古典からWHO標準へ〕東京・醫齒藥出版、二〇〇九年）、前掲注（3）所引眞柳書四六七―四七一頁參照。天回（老官山）木人については、猪飼詳夫「四川成都老官山の醫學資料概観」（『漢方の臨床』六三卷三號、二〇一六年）、天回醫簡整理組編著『天回醫簡』（文物出版社、二〇二二年）一六一―一八四頁、眞柳誠「張仲景以前の中國醫療」（12）（14）（『漢方の臨床』第七〇卷第二號／第四號、二〇二三年）參照。

（12）『玄門脈訣內照圖』「內丹要訣云、坎卦☵外昏內明、離卦☲外明內昏、任督二脈、爲一身陰陽之海、五氣眞元、此爲機會。而（斷）〔斷〕交二穴在唇內齒上縫、爲任督二脈之會、（二）〔二〕身之要。世人罕知之。至人漱煉、惟服此藥。仙經云、一物含五彩、（水）〔永〕作仙人祿。言其備五行之英華、總二脈之交會。自古眞人祕此一穴。訣在於口、不傳文字。仙經曰、（吾）〔若〕人恆但腹空平心、閉目握固、澄神啄齒、漱煉口中、玉液滿口嚥之、令人耳聰目明、延年益壽也。」「陰海陽海二圖」と題して右記の「內丹要訣」を載せ、その後に「陰海」圖として人の全身正面圖が描かれ、圖の後に『銅人圖經』及び『難經』二十八難の唐楊玄操注の任脈を説いた一節が解説文

として附されている。次いで「陽海」圖として人の全身背面圖が描かれ、同様に『銅人圖經』及び『難經』二十八難の楊玄操注の督脈を説いた一節が附される。圖に任脈・督脈は描かれていない。『內照圖』の成立及び醫術と道教における身體圖の影響關係については、三鬼丈知「華佗內照圖について」（『醫譚』復刊第一〇一號通卷一八號所收「日本醫史學會關西支部二〇一四年秋季學會抄録」二〇一五年）參照。「內丹要訣」の成立については不明であるが、任脈と督脈を一對の陰海と陽海と見なしていることから、北宋以降と考えられる。王好古『廣爲大法』（一二三四年著、一五三四年刊）卷一所引「內丹訣」、『普濟方』（一四〇六年頃）卷一所引「內丹訣」及び『大洞玉經』（未詳）太无晨中君刊峨眉山中洞宮玉戸太素君道經第三十八に收録される「大洞帝一玉符」の祝に、類似する文が見える。『廣爲大法』所引「內丹訣」については、三鬼丈知「王好古『廣爲大法』所收の身體圖についての考察」（『醫譚』復刊第一〇二號通卷一九號、二〇一五年）八二頁參照。

（13）『黃庭經』は、存思を主とするいくつかの修行法を韻文で記す經典であり、この經典を何度も讀むことが修行の代わりになると考えられていたようである。『黃庭內景經』と『黃庭外景經』の二つのバリエーションがあり、ここに引かれる二句は『黃庭內景經』の一部である。成

立については諸説あるが、王羲之が三五六年に書寫した『黃庭經』が現行の『黃庭外景經』に當たり、その後六朝時代に増補、再構成されたのが『黃庭內景經』という麥谷邦夫氏の説（『黃庭內景經』試論、『東洋文化』六十二、一九八二年）に従いたい。

- (14) 王松齡「古氣功書中の隱語和術語」中に五行相剋に従つて五臟に氣をめぐらす「五行相克周天」の圖が見える（『中國當代氣功精論』人民體育出版社、一九九〇年五三三頁）。

- (15) 『幼真先生服內元炁訣』行炁訣（『雲笈七籤』本）「下丹田近後二穴、通脊脈、上達泥丸。泥丸、腦宮津名也。每三連嚙、則速存下丹田所得內元炁、以意送之、令入二穴。因想見、兩條白炁夾脊雙引、直入泥丸、熏蒸諸官、森然遍下毛髮面部頭項兩臂及巨手指、一時而下入胸至中丹田。中丹田、心宮神也。灌五藏、却歷入下丹田、至三星、遍經胛膝脛踝、下達湧泉。湧泉、足心是也。」前揭注（2）所引三浦論文九一一頁に詳細な分析がある。
- (16) 『老子中經』第三神仙「王父在左目、王母在右目、童子在中央、兩目等也。兆欲修真、當念東王父西王母、正在頭上有三人竝立、乃合日月精光、下念紫房太一絳宮黃庭太淵丹田、行其真氣五周、施于腹中、復行氣十二周、施于一身。道畢即止朱雀闕門。闕門、兩乳是也。」同第十九神仙「兩腎間、名曰大海、一名弱水、中有神龜呼吸、

元氣流行、作爲風雨、通氣四支、無不至者。」氣をめぐらす主な目的は、丹の原型でもあり、修行者自身の分身でもある胃中の神に氣を供給して養い育てることで、不死の自己へと生まれ變わることである。『老子中經』については、加藤千恵「『老子中經』—內丹の源流」（『煉丹術の世界—不老不死への道』大修館書店、二〇一八年）参照。

- (17) 精液を腦に還流させる「還精補腦」という房中の技法との關わりも考慮するべきだろう。初期における腦と腎の關係及び還精補腦の養生法については、前掲注（11）所引李建民論文參照。

- (18) 俞琰註以外の『周易參同契』經文はすべて「金氣」に作るが、件の俞琰注のみは「金氣」を「有無」に作る。
- (19) 『張紫陽八脈經』は柳華陽の『慧命經』にも收録されている。文字の異同はあるが、ほぼ同じ内容である。

- (20) 『奇經八脈攷』督脈「王海藏曰、張平叔言「鉛乃北方正氣、一點初生之真陽、爲丹母」（「鉛」からここまでが『悟真篇』七言四韻第十首「好把真鉛著意尋、莫教容易度光陰」葉士表注とはば一致する）。其蟲爲龜、即坎之二陰也、地軸也。一陽爲蛇、天根也。陽生於子、藏之命門、元氣之所繫、出入於此。其用在臍下、爲天地之根、玄牝之門、通厥陰、分三歧、爲三車。一念之非、降而爲漏。一念之是、守而成鉛。升而接離、補而成乾。陰歸陽

化、是以還元。至虛至靜、道法自然、飛昇而僊。」内容については、前掲注(12)所引三鬼論文「王好古『廣爲大法』所收の身體圖についての考察」八五―八六頁参照。

(21) 柳華陽については、伊藤光遠著、坂出祥伸解説『煉丹修養法』谷口書店、一九八七年、何宗旺『中華煉丹術』内丹編五―2「伍冲虚、柳華陽與『伍柳仙宗』」(文津出版社、一九九五年)参照。

(22) 『靈樞』五音五味篇「黃帝曰、婦人無鬚者、無血氣乎。歧伯曰、衝脈任脈、皆起於胞中、上循背裏、爲經絡之海。其浮而外者、循腹右上行、會於咽喉、別而絡唇口。血氣盛則充膚熱肉、血獨盛者澹滲皮膚、生毫毛。今婦人之生、有餘於氣、不足於血、以其數脫血也。衝任之脈、不榮口唇、故鬚不生焉。」

(23) 石田秀實氏は、道教における督脈に「陽脈的性格を與えるために、眼から始まって腎へ下降する支流を中心としてとらえて」いることから、醫術における經路との間にずれが生じていると指摘している(『氣・流れる身體』平河出版社、一九八七年、四六―四八頁)。

關於任脈督脈和煉丹的結合

加藤 千惠

當今道教學界普遍認為，煉丹過程中的氣的主要周流路線相當於醫學上的任脈督脈，這在各種道教辭典中均有記載。但在此次考查中發現，在現在存在的文獻中，任脈督脈各有四到五種不同的路線，二脈本來不是連接在一起的一對脈。直到北宋王惟一《銅人腧穴針灸圖經》，才確定了現在被所認知的路線。盡管如此，大家仍然認為像現在這樣的任脈督脈很久以前就存在，並形成了它與煉丹的氣周流相同的說法。我對其背景進行了考察。宋末元初俞琰和明李時珍提出任脈督脈之說，講仙術之氣的周流，但煉丹家們似乎並不輕易接受醫家的說法。到了很久以後，清朝的柳華陽提倡的並不是醫家原來所說的路線，而是仙家的任脈督脈。雖然煉丹之氣的周流可以說是運行在任脈督脈中，但我想指出的是，其任脈督脈本身在其發展的過程中有着非常大的變遷和不同的說法，即使到了俞琰說出兩者的關係之後，煉丹家還需要相當長的時間才能自己主張任脈督脈的說法。